

中部和楽器商組合

日本の音楽文化を 海外へ発信したい

半製品を購入し、組み立てて販売するのが小売店の仕事

尾張名古屋は芸どころと言われていました。芸に楽器はつきものです。名古屋には三味線や琴などをつくる職人もたくさんいました。中部和楽器商組合の元になった愛知商工組合が結成されたのは大正時代で100軒ほどが加入していたようです。昭和20年代に愛知和楽器商組合となり、40年代半ばに現在の組合名となりました。組合員は愛知、岐阜、三重の3県で18軒、大半が小売店で、琴と三味線を中心に販売しています。

小売とはいっても、琴や三味線は半製品で仕入れて、店で完成品に仕上げます。例えば三味線は胴や竿、糸巻などそれぞれ専門の職人から仕入れ、皮を張り、竿をつけて組み立てます。

かつては、この地域にも多くの職人がいましたが、現在は、琴は広島県福山市と埼玉県、三味線も関東と関西などで主に製作されています。

琴を弾くときに使う爪や三味線のバチは象牙や



琴の練習に励む学生

べっ甲が使われます。しかし、昭和55年（1980）に日本もワシントン条約を批准し、輸入することはできなくなっています。

琴や三味線は高校生や大学生にも人気

中部和楽器商組合がつくられた昭和40年代は和楽器業界が盛んな時期で40軒以上が組合に加入していました。40年代から50年代は琴がブームで、その後60年代頃までは民謡ブームで三味線の仕入れが間に合わなくなるほど売れたということです。

平成14年（2002）から学校教育の中に和楽器が取り入れられていますが、その中心は琴と三味線です。その影響なのか、高校や大学などで、和楽器のサークルが活発になっています。国も日本の文化を見直すため和楽器の教育に力を入れていますが、昔に比べ、和楽器の需要は大きく落ち込んでいます。学校で和楽器に接した子どもたちが興味を持ち、自分で演奏するようになれば、日本文化の海外への発信に役立ち、業界も大きな役割を果たせます。



三味線の皮張り